

津山市の文化財調査 2 —町家—

建造物研究室

美作津山は慶長8年(1603)に森忠政が城と城下町を築き、それを基礎にして発展してきた都市である。旧城下町の東辺部は城東地区と呼ばれ、ここに町家が集中的に残っている。城東地区の町家・町並の様相を知る手掛りとして、町家分布調査と町家10棟の調査を行った。城東地区の北には旧武家地があり、武家屋敷1棟を調査した。

町家の平面 町家の平面は東側に土間(トオリニワ)、土間に沿って3~4室を配するいわゆる町家型の平面である。間口が狭いと居室は1列、広いと2列に並ぶ。調査した町家の平面は1列系が7棟、2列系が3棟である。

1列系町家 調査家屋のうちで一番古い太田原家は享保(1716~1736)頃創建の町家で当初は1列2室の平面であった。この家は江戸末期の改造で一列3室としている。当家は間口5間で、2列系に匹敵する面積をもつが、土間が家屋の半分を占め、また2室とも10畳、12畳相当と広い。町家の中でも特異な平面といえよう。宝暦(1751~1764)頃の建築と推定される松本家は細部は不明であるが1列4室の平面をもつ町家であったと考えられるが、江戸時代末期に西側へ間口2間を拡大して2列系の平面とした。秋山家は居室を1列2室とするが、シモノマが土間となる。当家は代々主に鎌を製作する鍛冶であり、現在も鍛冶を続けている。ミセノマは土間であるほかに、天井がなく屋根まで吹抜けであり、大きな煙出しが設けられている。ミセノマが鍛冶の作業にふさわしくつくられている点が特徴である。高田家(東)も1列2室でミセノマは土間であった。秋山家とも近く、周辺は鍛冶屋が建ち並んでいたところであり、当家はもともと鍛冶のための家屋であったと考えられる。高田家(西)・川端家・福井家は江戸時代末期から明治初期にかけての1列3室の町家の典型例である。

2列系町家 2列系の代表的町家は宝暦頃に建てられたと考えられる大型の町家菊田(善)家である。この家は現状では3列になっていて、3列目には12畳半のザシキとその前室、式台付の玄関などがある。2列目中央の2室には、トコ、タナの改造や長押を取り払った改造などが

認められる。2列目中央の2室が当初のザシキ前室と考えられ、江戸時代末期頃にここを大改造し、現在の座敷・玄関構えなどを増築したらしい。荻田(直)家は明治4年に建てられた町家で2列6室あるが、表側2室は事務室に改造され、現在に至っている。梶村家は大型の町家で明治初年の建物であるが、大正～昭和前期に座敷を増築し、その際主屋内部も改造されていて、旧状はよくわからない。

廂と主屋の取付 津山の町家の特徴は、主屋正面の廂の取り付き方にある。1階正面では主屋本柱筋から3尺前に出る廂がある。本柱筋には内法高ほどの位置に緩く反り上った胴差を用いこの胴差の下では柱や柱間装置の痕跡を見出すことができないので、正面の柱間装置は全て主屋本柱筋にはなく、廂前面の位置になる。本柱筋と廂とを繋ぐ横材はなく、垂木のみで結合され、廂は構造的には独立する。この廂は土廂から発展して室内に取り込まれたとは考えにくく、もともと廂前面に柱間装置があり、しかも構造的に独立するという特色をもっていたと考えられる。こうした廂の取り付き方は広島・鞆の町家でも見受けられるが、あまり類例がない。山陽地域に分布することも考えられ、今後の調査によって類例が増すかもしれない。

町家の分布調査 城東地区の町家を外観によって観察し、用途・構造・建設時期・保存度の4項目について分布調査を行った。用途別では住居専用121戸、店舗・事務所併用住宅などが166戸、空家10戸、空地・駐車場が23カ所あり、この地区では商業活動が続いていることがわかる。構造別では木造が225戸と圧倒的に多く、木造モルタル造53戸、鉄骨・鉄筋コンクリート造が19棟ある。建設時期別では江戸時代が106棟と約1/3を占め、明治50棟、大正～昭和戦前が61棟、戦後から近年の建物が81棟ある。保存度別にみると、町家の外観を良好に保持しているもの・改造が小さいものが142棟で、城東地区で伝統的な町並が生き続けていることをうかがわせる。一方町並景観にそぐわないものも84棟ある。構造体は古いが改造のあるものが71棟あるが、修景によって町並景観へ調和できるものとして潜在的価値評価が可能であろう。

城東地区の町家の分布調査から、この地区が優れた町並景観を保持し、伝統的建物が集中していることがわかる。津山の町づくりの中で、この地区の将来構想を検討する必要がある。なお、次年度は城西に位置する武家屋敷群の調査を行う予定である。(上野邦一)